



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	形容詞の「ク形」を辞書に載せるべきか
Author(s)	バックハウス, アンソニー・E; Backhouse, Anthony E.
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 11, 9-18
Issue Date	2008-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/45673">https://hdl.handle.net/2115/45673</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC011_006.pdf



# 形容詞の「ク形」を辞書に載せるべきか<sup>1</sup>

アンソニー・E・バックハウス

## 要 旨

本稿は、「フランスに長く住んでいた人」の「長く」のように、動詞を修飾しその動詞が指し示す動作・出来事の様態を表す「ク形」をどう捉えるべきかを考察するものである。このような「ク形」を形容詞（長い）の一用法と捉える見方がある一方、形容詞から派生した副詞（長く）と捉える見方がある。前者は活用の問題として、後者は派生として見る見方である。

一般に派生は、生産性及び意味・用法の透明性において、活用よりも不規則であると考えられている。本稿ではこの観点から、新聞コーパスを利用し、18の基本的形容詞に関して、「ク形」のあり方を調べた。今回のコーパスでは、18語中9語の「ク形」について不規則性が見られ、生産されないものが1語、対応する形容詞からは意味・用法が予想できないものが8語であった。

この結果は、「ク形」が不規則な要素をかなり多く含んでいることを示唆し、日本語の辞書、特に産出についての記述も要求される学習者用の辞書において、より広く「ク形」を個別に取り上げる必要があることを示すものと言えよう。

〔キーワード〕 形容詞と副詞、派生、日本語学習辞書

## 1. はじめに

「フランスに長く住んでいた人」の「長く」のような語（以下、形容詞の「ク形」と呼ぶ）は形容詞か副詞かをめぐって、以前から論じられてきた。

形容詞という捉え方については、畠（1991:25）は次のように紹介している。

「…その語彙的意味の一貫性や、程度の修飾を受けるなど、もとの形容詞・

形容動詞<sup>2</sup>との共通性があまりに深いため、品詞論の立場ではこれらの語は形容詞・形容動詞の連用形の副詞用法として扱われるのが一般的である。」

これに対して鈴木 (1972:463) は 「これまでの文法論で、形容詞、形容動詞の連用形とみとめられていたもののうち、動詞 (あるいは形容詞) の意味を限定し、文のなかで修飾語や状況語としてはたらくものは・・・副詞 (形容詞派生の副詞) とみとめた。」と述べ、Martin (1975:467) は、動作の様態を表すものを 「... an adverb that is lexically derived from the infinitive... (形容詞の連用形から語彙的に派生された副詞)」と見なし、「each such DERIVED ADVERB ... should probably be listed separately in the lexicon ... in order to show that the nuclear-adverbial interpretation is possible (こういった派生の副詞は、様態副詞として解釈できることを示すために、辞書に個別に載せるべきであろう)」と論じている。

つまり「長く住んでいた」の「長く」は、一方では「長い」という形容詞の副詞的用法として、他方では「長い」の「ク形」から造語法のプロセス (ゼロ派生/転成) によって派生した「長く」という副詞として見なされてきた。

本稿の考察に入る前に、ここで形容詞の「ク形」の用法を整理しておく、少なくとも以下の6つの用法が区別できる。

- (1) 天気がよく、夕日が美しかった。
- (2) 白く長い布
- (3) 寒くない
- (4) 寒くなる、高くする、大きく見える、うれしく思う、寒く感じる
- (5) 黒く焦げる、短く切る
- (6) 長く住んでいる人

(1) はいわゆる中止めの用法で、(2)もこれに準じる。(3)は「ある/ない」と結合する用法である。(4)では動詞と組む用法だが、「ク形」が必須項で動詞の補語として機能している。(5)は(4)の「～くなる、～くする」と同じように変化の結果を表すが、ここでは(4)と違って「ク形」がなくても「焦げる、切る」単独で文として成り立つ。(6)は動作や変化の様態や度合いなどを表し、動詞を修飾する用法である。

この6つの用法の位置付けについては、副詞を認める学者の間でも意見

が分かれている。鈴木 (1972:468-70) は(1)~(4)では「ク形」を形容詞と見なし、(5)と(6)では副詞と位置付けているが、Martin (1975:467) は(6)の動作の様態を表すものだけを副詞と見なししている。本稿では(6)の用法についてのみ論じることにする。

## 2. 日本語学習者の視点

上で見たように、形容詞の「ク形」すべてを形容詞と見なす考えと、その一部を副詞と見なす考えが行われてきた。これは言い換えれば、「ク形」すべてを形容詞の活用形として扱うか、一部を派生された、別の単語として扱うかの違いである。一般的に言って、活用の世界は形式的にも意味的にも規則的とされているのに対して、派生の世界では、規則的なケースがあっても、例えば、できるはずの派生語が同じ意味を担っている単語がすでに存在するためにできない、いわゆるblockingなどの形式的な制約や、元の単語の意味からは予想できない意味の変化などの意味的な不規則性が頻繁に起きると考えられている。

ここで辞書論の視点から論じてみよう。辞書には規則的な項目(活用形、派生語の規則的なもの)には個別に触れないが、予想できない、不規則な項目を親見出または子見出しにして取り扱うのが原則である。これを「ク形」に当てはめれば、例えば意味・用法に元の形容詞の意味・用法から予想できない要素があれば、それを別の項目として取り扱うべきだとするものである。上で見たように、「…語彙的意味の一貫性…など、もとの形容詞…との共通性があまりに深いため」に副詞用法論が唱えられてきたが、従来の国語辞典を見ても、「よく」、「うまく」など、一般的に副詞として取り扱われている語がある。これは「よく喋る」、「うまくいく」などにおける「よく」、「うまく」の意味・用法は形容詞の「いい」、「うまい」の意味・用法から予想できないために他ならない。

国語辞典では、予想できない要素としては特に理解のレベルの要素が注目される。形容詞「いい」の意味を知っているだけでは、「Xさんはよく喋る。」の「よく」の意味は正確に理解できない。しかし理解の問題のほかに、使用のレベルの問題もある。例えば形容詞の「短い」の意味・用法から考えて、その「ク形」である「短く」を時間の長さについて使えそうだが、実際には「イギリスに短く住んでいた人」のような言い方は日本語

としては不自然である。日本語を外国語として学んでいる学習者の場合、形容詞「短い」は具体物の長さにも時間の長さにも自然に使われるにも関わらず、「短く」は時間の長さに使われないことは知るよしもない。つまりこのような使用における制約も予想できない要素であり、特に日本語学習者を対象にした辞書には「短く」を見出しにして載せるべき情報であることの論拠となる。

ここで、使用のレベルも視野に入れながら、元の形容詞とその「ク形」の間の意味・用法の「一貫性」をボトム・アップで探ることにしたい。そのために、基本的と思われる形容詞の意味領域 (Dixon 2004 参照) から以下の語について、その「ク形」の用法(6)における使われ方を新聞コーパスで調べることにする<sup>3</sup>。

大きい／小さい、長い／短い、新しい／古い、いい／悪い、白い／黒い、重い／軽い、寒い、うれしい、早い～速い／遅い、多い／少ない

### 3. コーパス調査の結果

ここで上述の形容詞の「ク形」について主な結果を紹介する。

#### ●大きく／小さく

「大きく／小さく」のいちばん大きな違いは、「大きく」は変化、差、影響などの度合いについて多く使われるのに対して、「小さく」は「小さくうなづく」のように、具体的な動作や動きの様子だけに使われていることである。「大きく」の強いコロケーションには<sup>4</sup>、「変わる／変化する／変える」、「上回る／下回る」、「違う／異なる」、「影響する／左右する」などが上位を占めるが、「小さく」の場合は具体的な動きを表す「小さく変化するスライダー」以外に、このような動詞は現れない。形容詞の「大きい／小さい」では、「影響が大きい」も「影響が小さい」も自然な表現であるのに対して、「大きく／小さく」では「大きく影響する」だけが自然で、「小さく影響する」は使われないようである。つまり形容詞「小さい」に対して、用法(6)における「小さく」の意味・用法の範囲は縮小されていることが分かる。これには「少し」などによる blocking が要因として考えられよう。

### ●長く／短く

上述したように、形容詞の「長い／短い」が共に空間・時間について使われるのに対して、新聞コーパスでは「長く」は主に時間を表し、「短く」は専ら空間を表す。形容詞としては共に「間、期間、時間」と強く共起し、「フランスにいた期間は長かった／フランスにいた期間は短かった」が共に自然だが、「ク形」では「フランスに長くいた」とは言えても、「フランスに短くいた」とは言えないようである。「小さく」と同様、「短く」の意味・用法の範囲が元の形容詞に比べて縮小されていることが分かる。

### ●新しく／古く

「新しく」には「作る／できる／生まれ変わる」が強いコロケーションになっている。それに対して、「古く」は強いコロケーションがなく、用例も少なく、主に「大昔」という意味の時点を表すのに使われている。この「古く」を副詞として扱っている国語辞典もある。

### ●よく／悪く

「悪く」には「言う」だけが強い動詞のコロケーションになっている。それに対して、「よく」の強いコロケーションは広い範囲に渡っている。形容詞の「いい」が評価を表すのに対して、用法(6)の「よく」はこの他に量や度合い(「英国の人たちはよく食べる。」、頻度(「寄せ鍋をよく食べる」)を表すことが多く、意味の範囲が拡大されている。この場合の「よく」の対義語としては、「悪く」は使われず、「あまり」が登場することが多い。このような意味拡大が理解レベルの問題をもたらすことから、従来の国語辞典でも「よく」は副詞として扱われるのが一般的である。

### ●白く／黒く

強いコロケーションはすべて用法(5) (「白く濁る」、「黒く塗る」など)のもので、いずれも用法(6)の用例 (「白く浮かぶ」など) は数少ない。この二つの語に関しては、意味・用法においては元の形容詞と大きな違いはなさそうである。

### ●重く／軽く

「重く」が主に抽象的な事柄 (「重く受け止める／のしかかる／響く／

罰する」が主なコロケーション)に使われるのに対して、「軽く」の範囲はこれより広く、「軽く考える／扱う／あしらう」の他に、「軽くたたく／押す／会釈する／笑う／温める」、さらに「軽く越える／突破する／上回る」が強いコロケーションとなっている。この最後の「軽く越える」などにおける「軽く」は日本語学習者には例えば「少しだけ」という意味に取られやすいと思われる。なお、この意味の「軽く」を副詞として扱っている国語辞典もある。

### ●寒く

用法(6)の用例はない。日本語学習者にとっては、「寒く吹き付ける風」などが成立しそうな表現だが、この場合は「冷たく吹き付ける風」が自然なコロケーションである。用法(6)の「寒く」は存在しないケースのようである。

### ●うれしく

用例が少なく、すべてが丁寧なコンテキスト(敬語、「うれしくVしたいと思います」など)に現れている。「うれしく読ませていただきました。」が自然なのに対して、「うれしく読んだよ。」は不自然と思われるが、「読んでうれしかったよ。」のように形容詞「うれしい」にはそういう制約がないとすれば、これは意味・用法の縮小と見るべきであろう。

### ●早く～速く／遅く

「早く～速く」が時点(「早く起きる」)、期間(「早く忘れる」)、速度(「速く走る」)について使われるのに対して、「遅く」は、ほとんどの場合、時点(「遅く起きる」など)を表す。コーパスの140用例中、例外は「変化の原因のひとつは、地球が太陽を回る軌道がやや楕円(だえん)であるために、太陽が近づいたときには速く、遠ざかったときには遅く動くためだ。」の一つだけであった。形容詞「遅い」では「遅いペース」、「遅い球」、「歩くのが遅い」が自然だが、「遅く歩く」の受容性については母語話者の間でも判断が分かれる。少なくとも「遅く」には時点を表す傾向が強いと言えそうであるが、これには一部「ゆっくり」などによる blocking が考えられよう。

●多く／少なく

「多く」は、「多く含む／住む／抱える／残す／残る」など、強いコロケーションの範囲が広い。これに対して、「少なく」の用法(6)の用例がほとんどなく、「多く」のコロケーションに相当する「少なく含む／住む／抱える／残す／残る」のような用例がない。形容詞では「Xに住んでいる人が多い」、「Xに住んでいる人が少ない」は共に自然だが、「ク形」では「Xに多く住んでいる」は問題がないが、「Xに少なく住んでいる」は不自然と思われる。ここでまた「少し」などによる blocking が考えられないこともないが、それではなぜ「多く」が「たくさん」などに blocking されないのかという疑問が出てくる。この場合「多く」と「たくさん」は確かに意味的に近いが、文体的特徴がかなり違うことが重要な要素になろう。

4. まとめと結論

以上、元の形容詞の意味・用法との一貫性の観点から、用法(6)における代表的な「ク形」を新聞コーパスを用いて調べてきたが、その主な結果を表にまとめると次のようになる。

形式	意味
大きく	
小さく	縮小 (具体的な意味のみ)
長く	
短く	縮小 (空間のみ)
新しく	
古く	縮小 (=「大昔」)
よく	拡大 (量、頻度)
悪く	
白く	
黒く	
重く	
軽く	拡大 (「軽く越える」など)
寒く	X
うれしく	縮小 (丁寧な表現のみ)
早く～速く	
遅く	縮小 (時点を表す場合がほとんど)
多く	
少なく	縮小 (限られた範囲)

これによると、形式または意味において元の形容詞から予想できない要素が18語中、9語について見られたことになる。1語については「ク形」が用法(6)では形式として現れず、8語については意味の変化（縮小または拡大）が生じていることが分かる。これは一つの限られたコーパス調査の結果に過ぎないが、従来の国語辞典で扱われている「よく」、「うまく」など以外にも、「ク形」には不規則な要素が多く潜んでいることを示唆する結果であって、日本語の総合的な記述のため、特に日本語学習者のニーズから考えて、辞書に載せるべき情報と思われる。品詞論の観点から言えば、これほど不規則性が見られるということは、「ク形」が活用よりは派生の世界に属する現象であることを裏付けるものと言えよう。不規則性が見られない「ク形」があることも事実であるが、これは派生によく見られることである<sup>5</sup>。この点から個々の形容詞と「ク形」の関係をさらに究明するために、今後とも広範囲で緻密な意味・用法の記述が望まれる。

#### 注：

- 1) 本稿は2007年11月に第15回北海道大学留学生センター日本語教育ワークショップ「コーパスを利用した日本語文法・語彙の研究」で発表したものに加筆、修正を加えたものである。
- 2) これは形容動詞（ナ形容詞）にも関わる課題であるが、本稿では形容詞（イ形容詞）のみを取り上げる。
- 3) コーパスは『CD－毎日新聞1999年版』を用いた。コロケーション情報は茶漣 (<http://tell.fl.purdue.edu/chakoshi-wiki/>) による。
- 4) 本稿でいう「強いコロケーション」とはtスコア値が2以上という高い確率で共起する語の組み合わせを指す。
- 5) quicklyなどのように英語の接尾辞 -ly を含む語にも同じようなことが見られる。-ly を派生語尾と見なすのが主流であるが、活用語尾と見なす考え方も一部にある。(Brinton and Traugott 2005:132-6参照)

#### 参考文献：

- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 畠 郁 (1991) 「副詞論の系譜」『副詞の意味と用法』 国立国語研究所
- 毎日新聞社 (1999) 『CD－毎日新聞'99データ集』 日外アソシエーツ
- Brinton LJ and Traugott EC (2005) *Lexicalization and Language Change*

Cambridge University Press

Dixon RMW (2004) 'Adjective classes in typological perspective', in RMW  
Dixon and AY Aikhenvald eds *Adjective Classes* Oxford University  
Press

Martin SE (1975) *A Reference Grammar of Japanese* Yale University Press

謝意：

筆者は2008年3月に北大の定年退職を迎えることになり、留学生センター  
紀要の編集は今回で最終回となります。10年間一緒に編集委員を務めてく  
ださった小林ミナ先生(第2号～第9号)、小河原義朗先生(第10号～ )、  
中村重穂先生(第11号～ )にこの紙面にて感謝の意を表します。

## Should adjectival *-ku* forms be in the dictionary?

Anthony E BACKHOUSE

This paper considers the status of forms such as *nagaku* in *Furansu ni nagaku sunde ita hito*, where a form identical to the *-ku* form of an adjective describes the manner of the action or event denoted by the verb. Some regard this as simply one use of an adjective (NAGAI), whereas others see it as involving a de-adjectival derived adverb (NAGAKU) as a distinct word. The first view thus treats this use as a matter of inflection, the second as a case of derivation.

Derivation is generally seen as being less regular than inflection, in terms of both productivity (i.e. ‘gaps’ occur) and semantic transparency (i.e. unpredictable changes of meaning and use occur), and in principle any such irregularities call for treatment as separate items in dictionaries. This paper uses a newspaper corpus to examine the behaviour of *-ku* forms relating to 18 basic adjectives from this perspective.

For the corpus employed, the findings indicate that 9 of the *-ku* forms examined show significant irregularities, either through non-occurrence in this use (1 item: *samuku*) or through semantic unpredictability compared with the corresponding adjective (8 items: *chiisaku*, *mijikaku*, *furuku*, *yoku*, *karuku*, *ureshiku*, *osoku*, *sukunaku*). This result lends support to the derivational view, and points to the need for more extensive incorporation of *-ku* forms as adverbs in dictionaries, particularly for learners of Japanese, who need guidance for natural production as well as for comprehension in this area.